ケータイ・ネットと子どもたちの人権　［第6版］

奈良県立磯城野高等学校　黒田恵裕

(インターネット掲示板差別書き込みについて考えるプロジェクト会議)

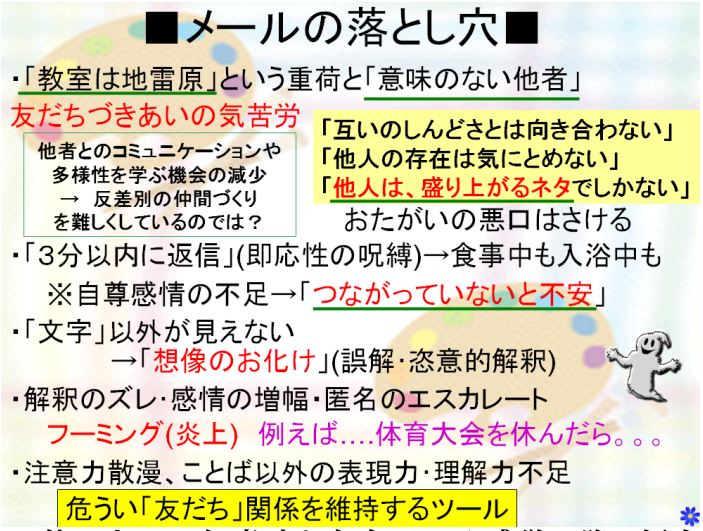
「学校裏サイト」「プロフ」「ネットいじめ」などが最近注目されていますが、ケータイ(携帯電話)をめぐる子どもたちの危険な状況が指摘されています。子どもの安全のため・友だちから孤立しないために与えたはずのケータイが、子どもを危険にさらし、時には子どもの人間関係を崩してしまう実態があります。「情報と人権」を軸に、子どもたちのケータイ依存やネットの落とし穴、情報リテラシーや人権教育課題について、大人の責任として考えてみましょう。

■1■　ケータイ・ネットトラブルへの対策　～　基本は生身の人間関係

子どもに関わる事件の影にケータイあり、との報道が相次いでいます。小学生の3割、中学生の6割、高校生のほとんどがケータイを持ち、その大半がメールを使い、Webサイトを閲覧し、個人Webサイト(ホムペ)を持つ子どもも少なくありません。ケータイはもはや電話機ではなくパーソナルネットツールだという認識が必要です。

ケータイがらみのトラブルには特別の対応が必要なのではないかと考えがちですが、やはり基本は生身の人間関係に属する問題です。他者との信頼関係の構築・維持・問題解決の力を子どもたちに育てる取り組みが大切です。その上で、ケータイ・ネットの特性をふまえた活用能力(リテラシー)を身につける必要があります。道具の向こうにいる人をどのように意識し、道具を使っていかに人と向きあうかが課題です。

■2■　メールの落とし穴　～　存在の確認と「想像のお化け」



ケータイを手放せないという子どもが増えています。友だちとの関係を維持するために頻繁にメールのやり取りをし、互いのホムペをのぞいています。メールやＢＢＳ(電子掲示板)への書き込みによって、自分を認知してくれる人間の存在を確認しているともいえます。親密なように見えて、その維持に大変な緊張を強いられる友だち関係は、互いを受けとめ向き合う関係とは言えません。その維持に神経を使うあまり、「その他の人々は無意味な存在」という感覚に陥る傾向も指摘されます。同級生等を「盛り上がるネタ」にして傷つける行為は、悪質であると同時に、自

身の信用を失わせることや、ネット上の自身の評価･位置を守るためにリアルとバーチャルが逆転してしまう不自然さにも気づかせる必要があります。現実の他者との関わり方も学ばせなければなりません。

不安定な自尊感情、異なる人と交わり学ぶ姿勢の不十分さ、「互いのしんどさとは向き合わない」「異質を排除する」という傾向は、反差別の仲間づくりを難しくしているのではないでしょうか。

また、コミュニケーションの7～8割はノンバーバル(非言語)と言われますが、文字列だけでは相手の意図を「想像で穴埋め」せざるを得ず、そこに誤解や拡大解釈という「想像のお化け」が発生します。学校でのトラブルが放課後のネットに持ちこまれ、ささいな不満も同情を引きつけるために誇張され、友だちの間を飛び交うメールが「悪人」を仕立て上げます。これがホムペやＢＢＳに持ちこまれ、「匿名によるエスカレート」が加わると、自分の悪口が延々と記されたページを見つけたり、そのアドレスをメールで受けとった子どもは、数多くの友だちが閲覧しているだろうことにも恐怖と不安を感じ、学校へ行きづらくなります。頑張って教室に入っても、ケータイを手にする友だちを見ただけで体が震えるといいます。

子どもたちのメール相手やホムペの相互訪問者が直接知り合う友だちであることが、敵意や不安の増幅(フレーミング)という悪循環を生み出しています。

■3■　サイト閲覧の落とし穴　～　世界の実験台とフィルタリング

1999年にケータイからのネット接続が可能となり、2007年にはモバイル市場が1兆円を超した日本は、豊富なケータイWebサイトがある唯一の国です。日本の子どもたちは世界の実験台にされてきたともいえます。

奈良県では、啓発連協「インターネット掲示板差別書き込みについて考えるプロジェクト会議」が取り組む「インターネットステーション」の活動により、一定の成果も上げていますが、残念ながら、ネット上には有害･差別的なＢＢＳやWebサイトは無数に存在します。ケータイからしかアクセスできないWebサイトも多数存在し、子どもたちは、保護者や教員のチェックを受けずに、そうしたWebサイトにも簡単にアクセスできます。そして、ケータイを使いこなせない大人の目をかいくぐり、学校裏サイトなどに、子どもや教員の悪口が日々書き込まれているのが実態です。

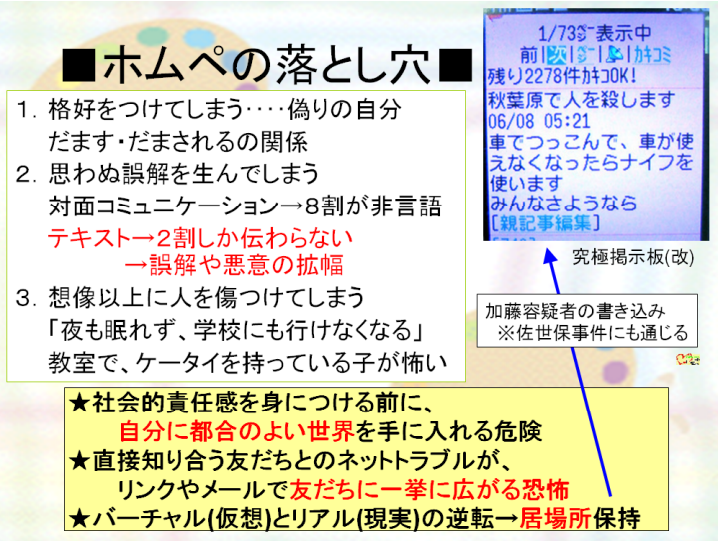
2008年、18歳未満の青少年にはフィルタリングが原則義務づけられ、遅きに失したとはいえ、これまでの無防備な状態が幾分解決されると思われます。しかし、問題点も多く指摘されており、さらに技術的対策だけで解決できる問題ではないことも忘れてはいけません。

■4■　ホムペの落とし穴　～　中高生のホムペと「ネットいじめ」

3人に1人の中高生が持つホムペは、パソコンやケータイで瞬時に作れるサービスを使ったものが多く、プロフ(プロフィール)･日記･写真･ＢＢＳ･リンクなどから構成されます。プロフは、相当数の中高生が持つネット上の自己紹介カードのようなものですが、自ら書き込んだ個人情報から

巻き込まれる犯罪、なりすましプロフによるいじめ等が問題視されています。日記・写真・ＢＢＳなどには、保護者や教員はもちろん、仲の良い友だち以外は絶対見ないという前提のものが多く見られ、自分の名前や顔写真を明らかにしながら同級生を中傷する事例も珍しくありません。

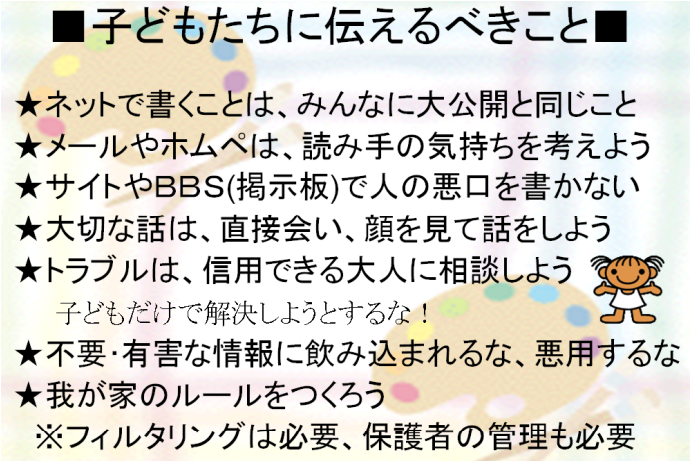
友だちへのささいな不満や悪口も、ネット上では短時間で拡幅されてしまいます。閲覧者の気を引こうとする心理が働き、相互批判を許さない「友人関係」を維持するため、「盛り上がるネタ」として心ない中傷が書き込まれがちです。リンク先には学校で毎日顔を合わせる友だちが多いことから、中傷はすぐに広まり、思わぬ迫力で敵意や恐怖を生むわけです。

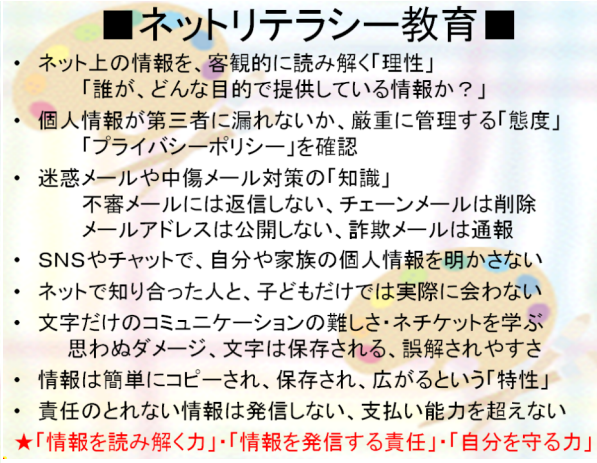


■5■　ケータイリテラシー　～　自主的ルール作りと「2つのJ」

不安な日々を過ごしている子どもは必ずいます。「どうせバレない」「たいしたことはない」と高を括っている子どももいます。被害者ケアは当然ですが、加害者へのアプローチも不可欠です。学校や行政は定期的な実態調査を行い、対策に取り組む必要があります。

ケータイは豊かな人間関係を創る可能性も秘めた道具ですが、誤解や悪意を拡幅し、子どもを絶望に落とし入れ、取り返しのつかない罪を招きかねない道具でもあります。「表現の自由」や「アクセス権」も大切な権利ですが、「子どもの成長への責任」放棄の言い訳にしてはいけません。家庭でも、ケータイ利用のルール作りや利用実態の把握を通し、信頼と責任のある監督をすべきです。学校においても、ネットリテラシー教育や自主的ルール作りに取り組みましょう。保護者や教員もケータイ・ネットにある程度明るくなることが求められています。





私は、「ネット上の人権文化創造」「2つのJ(人権と情報)」を念頭に諸サイトの運営をしてきました。参考資料・図書等を個人サイトで随時更新しています。ご参考になれば幸いです。

http://www5b.biglobe.ne.jp/~kurosan/JINKEN/Keitai/